

ガラス乾板に記録された住吉大社の風景

黒田 一 充

デジタル化が進み、学生たちは板書もスマホで撮影するようになるなど、大量の写真を記録する時代になった。少し前のフィルムカメラの時代は、現像やプリントの経費を考えると1コマ1コマ丁寧にシャッターを切っていたのと記録に対する考え方がまったく異なってしまった。

フィルムの前の写真は、ガラス板の表面に臭化銀乳剤を塗って感光させるガラス乾板で撮影していた。明治の後半から昭和初期にかけて盛んに使われたが、破損しやすく重いため、フィルムの普及で使われなくなった。

大阪市住吉区の住吉大社には、600枚をこえるガラス乾板が保存されている。箱に収まったままの状態のため、全体の枚数も何が写っているのかもよくわからなかった。今回、初めてデジタル化の作業をおこない、祭りや神事に関わる473コマの作業が終わったので、何が記録されていたのかを紹介したい。

まず撮影時期については、昭和7年（1932）の元日付けで発行された『住吉大社写真帖』の掲載写真と同じものがあり、この前後の時期であることがわかった。

写真1は、西側上空から撮影した境内の様子である。前面の石燈籠のところが整備されているのがわかる。大正6年（1917）から境内の風致改善工事が始まり、参道の敷石設置や神楽殿の新築、社務所の増築などがおこなわれた。石燈籠も電灯線の地中化工事にともない、境内の



写真1 上空から見た住吉社（1931年ごろ）

奥にあったものが正面側へ移された。写真からわかるように、今日見られる住吉大社の景観は、この時期に整備されたのである。

整備がほぼ終了した昭和6年（1931）4月4日から3日間、竣工奉告祭がおこなわれた。

写真2は、その時の写真だが、反橋前の絵馬堂付近に3基のだいぐく（台額・台昇）が見える。柱の上部に赤い布を円錐形にした鉾と傘状の髷籠を取り付け、下部には78個の提灯を吊している。住吉大社の摂社だった玉出の生根神社から出されたが、昭和20年（1945）の空襲で2基が焼失し、岡山に疎開していた1基だけしか今は残っていない。この3基が揃った写真は、貴重な記録である。

住吉大社の石鳥居からは、まっすぐ海浜へ向かって参道が延びていた。社前の海浜は長狭浦とよばれ、堺へ神輿が渡御する夏の住吉祭には、事前にここで神輿を潮水で清めた。住吉の潮湯



写真2 玉出のだいぐく（1931年）



写真3 もとの長狭浦（右奥に高燈籠）

といって、参詣者たちも海水につかる様子が江戸時代の絵画に描かれている。現在は阪神高速道路が通り、その下に流れる細井川付近がかつての海岸線にあたる。

写真3は、昭和初期の長狭浦の様子である。薪炭商の船を横付けする岸边には、水浴する女性や子供たちの姿が見える。右手奥の高燈籠は、鎌倉時代末に建てられたとされ、海からの住吉大社の目印だったが、昭和25年（1950）のジェーン台風の影響などで解体された。昭和49年（1974）に、この写真の位置から東へ約200メートル離れた場所に再建されたのが、現在の高燈籠である。



写真4 反橋を渡る大神輿

昨年（2016年）の神輿渡御祭では、目方700貫（約2.6トン）といわれる大神輿が、75年ぶりに担がれた。その大神輿が反橋を渡ってきたところを撮影したのが、写真4である。慎重に橋を下りてくる様子と、それを見守る大勢の人びとの姿をよくとらえている。

この夏の風景に対して、写真5は初詣の写真である。住吉大社は毎年大阪府下で一番初詣客が多い神社だが、当時も大勢の人びとが参拝していた様子が記録されている。右側の神社名の標柱と石鳥居の間に、小さな笠を売る露店が見える。縁起物の住吉踊で、今も正月には、反橋の前に店が出ている。この当時の女性はまだ和装が多く、男性は和装・洋装半々だが、ほとんどの人が帽子を被っている。それにしても、氷の



写真5 初詣風景（鳥居前）

のれんの店は、冬に何を売っているのだろうか。

石鳥居の奥にある神池に架かる反橋は、橋板に滑り止めはなく、足を掛けるための穴が空いているだけだった。その様子をとらえたのが、写真6である。石鳥居から橋を上っていくのはそれほどでもないが、社殿側の下りは穴から池の水面が見えることもあり、恐る恐る下りる参拝客の様子がうかがえる。

祭りや行事を主として撮影した写真だが、当時の人びとの服装や風俗、景観など様々な情報が記録されており、歴史資料としての活用ができる。しかしその一方、古い写真は撮影者が亡くなるとフィルムとともに廃棄されることが多くなっている。どのように保存と活用をすべきか、喫緊の問題となっている。



写真6 初詣風景（反橋）

本稿は、三菱財団人文科学研究助成による研究成果の一部である。